

「人は死なず馬鹿だけが死ぬ蟬しぐれ」—— 我々は死後も命を狙われている

Greatchain

May 23, 2025

この俳句は私の作ったもので、数年前、ある生命保険会社のサービスで、私が死んだときに開封して遺族に公表するようにと密閉されているものである。この約束を破って今、公表するが、実はひそかに私の句集に収められている。これはもともと、私の家族が悲しんでいるときに笑わせようと、ウケを狙ったものだが、数年たった今考えてみると、これは冗談ではなく、真面目な話であることが明らかになった。

これは我々より遙かに進んだプレアデス星人から教えられたことであるが、我々が死ぬとたいていは、家族や親切な知人ガイドとして現れて、道案内をしてくれると言われていることは、あてにならないらしい。なぜかというと、最近は、死後の我々を騙そうとしてニセモノの近親者が出てくるのだという。我々はこの世で結構騙されて生活している。我々に対する洗脳教育は驚くほど行き届いており、メディアや政府による愚民政策は十分に行われている。しかし靈界にまでは、それは及んでいないだろう、死ねば本当のことがわかるだろうと、何となく考えていた。それがそうではないことを初めて知って（少なくとも私は）驚いた。

マインドコントロールによる悪の支配は、あの世にまで及んでいる。我々の住んでいる世界は、何となく優越感をもつ無神論者に支配されていて、このような話になると「陰謀論」として一蹴される。たとえば私は、何年もダーウィン進化論を否定する「インテリジェント・デザイン」理論を推進してきたが、名指しで「ID に引っかかった馬鹿」呼ばわりされたことがある。この者たちは死んだらどうなるか？ 死んだらノタレ死にするだろう。我々が死後も死なないでいられるのは、我々が魂を持つ存在（我々自身が魂）だからである。

「そんなことは知っている」という人は大勢いるだろう。しかしプレアデス星人が細かく教える、我々の医療制度の驚くべき「情報操作」の実態を、知っている人々はどれだけいるだろうか？ また、これに関連して、私が先日（4/28）指摘した讃美歌「アメイジング・グレイス」の、馬鹿げた wretch（下らぬ人間）の告白に気づいている人は、どれだけいるだろうか？

我々は生きている間だけでなく、死んでからも、我々を騙そうとする者たちに対して闘わねばならない。「安らかにお眠りください」というのは間違いである。それはマインドコントロールされた者の言うことであって、人はこの世に生まれた以上、死んでも、自分と自分の仲間や環境を向上させる責任がある。アメリカという国家の、少なくとも原爆を落とす計画をした者たちは、日本の犠牲者を「安らかに眠らせ」ようと昔から画策してきた。このような者たちは、我々が真実に目覚めることを最も恐るので、我々の「ご冥福」を永遠に祈らねばならないのである。

プレアデス人たちは、特に日本人に対して「魂の主権を宣言せよ」と言っている。彼らは、この地球上で、神社・仏閣を持つ日本人が、最も世界をリードするにふさわしい者たちだと言っている。日本人こそ、真に自由な、創造主の「分け御靈」としての自覚を持っている。これは他の国、特にキリスト教国ではそうではない。

新しい教皇が異常に短時間で決まったバチカンをみればよい。バチカンは宗教的というより政治的機関である。このように制度化されたキリスト教は、イエス・キリスト自身の闘争的な教えとは全く別のものである。それは仮面をかぶった、アメリカの Deep State (深層国家)、イルミナティ、New World Order といったものと同じ闇のエリートのものであり、たとえばユーチューブに表明されている、私自身に対する天照大御神の、親しく同等な、宇宙的な愛の関係のようなものとは、まったくかけ離れたものである。

それは、言葉は平和的でも、実質的にこう言っている——「我々はお前たちより遙かに偉大で賢明な者たちだ。すべてを信頼して我々に任せよ。我々に対しては、**人間の尊厳**などというものを放棄せよ。」これはドストエフスキイの、有名な『大審問官』挿話の内容と全く変わらない。これはバチカンで、犯罪的ペドフィリアがあれほど騒がれながら、故フランシスコ法王が、ほとんどこれを無視したことに顕著に表れている。

これはバチカンに限らず、制度化した宗教組織では、ほぼどこでも同じであった。しかし今、革命が起りつつある。神と人間そして宇宙全体を、繋がった一つのものとして統制しようとする、プレアデスを始めとするいくつかの高次文明から見れば、我々の文明はすでに老衰状態に入っていることに気づかねばならない。しかし、人々はそれに気づかないか故意に無視している。そのために、大小のあらゆる故障や争いが、生じていると見なければならない。その最大のものは世界戦争か、さもなければ地球規模の自然破壊であろう。

それは神罰といつてもよいが、もっと科学的なものであろう。我々は中途半端な低次元、あるいは低波動の遅れた科学を信じて、優越感に浸っている限り、この自然界の破壊を免ることはできないだろう。

ついでながら、私はわずかに俳句をたしなむ者だが、ソネットと同じく、人間としての威信にかけて高い基準を自ら要求している。これもやはり人に褒めてもらうよりは、自分で納得するためである。

私は自分の母語である日本語を何より誇りに思っており、これを軽視する人を許せないから、このような句を辞世の句として載せている：

行く春やわが母語に告ぐ神と行け

また、私の最も尊敬するのはベートーベンであり、特にその「合唱」の wir betreten feuertrunken Himmelsche dein Heiligtum (我々は火(花)に酔いつつ天のあなたの聖殿を行く)に惹かれて、この句を作った。これを美学的という人もあるかもしれないが、これが私の最も自然な敬意の表し方で、愛弱を持っている：

春宵に酔い天のきざはしを行く

また私は、俳句に限らず、この世に謎や諧謔というものがなければ面白くないので、こんなものを書いて喜んでいる：

さえずりの絶え ものや立つ夕まぐれ (あるアメリカ小説から)

九十爺あな憎さげの鷹の舞 (自画像)

健陀多の蜘蛛何ゆえぞ人を慕ふ (芥川龍之介「蜘蛛の糸」参照)

寒雀お前の母さんデーベーソー

どござ行ぐべか家出の娘 かがさからかさ見え隠れ (東北弁どどいつ)

花冷えのくしゃみは派手に花吹雪

花吹雪あれまおまんき屁はいらぬ (花吹雪三部作)

秘するほどの花でもなかろ花吹雪